

【論文】

風景構成法作品と抑うつ・不安との関連¹

阿部 紗希 (岩手県立南光病院)

織田 信男 (岩手大学人文社会科学部)

I はじめに

風景構成法 (Landscape Montage Technique : LMT) は、1970年に中井久夫によって発表された絵画療法のうちの一技法であり、一般に「アイテム」と呼ばれる10の項目の名(川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石)を「見守り手」と称される施行者が一つずつ言い、描き手が描画用紙に一つずつ描いていくという手順で行われる(佐々木, 2005)。風景構成法は非言語的コミュニケーションの手段として考案、開発され(弘田, 1986)、現在でも病院臨床領域、福祉領域、司法領域、学校での学生相談領域など様々な臨床実践の場で用いられている。項目を逐次提示し、それに対し描き手が風景を構成してゆくというやりとりのなかで行われる技法であり、その関係性のなかから、描き手の心理的特徴が把握され、それが治療に活かされてゆく(皆藤, 1994)点で、描画法のなかでは療法的な側面も強い技法である。皆藤(1994)は心理療法のなかで風景構成法を使用する目的として、箱庭療法への導入の適応決定の判断材料とすること、初回面接ないしは治療の初期に施行しクライアントの病理水準や内的問題を把握する一助とすること、芸術療法の一技法として治療的に用いることの3つを挙げた。風景構成法を心理療法のなかで用いた事例研究は、神経症的登校拒否の描画について検討した研究やセラピストの主體的関与について検討した研究と幅広く多くの臨床家によってなされてきた(弘田・長屋, 1988; 浅田, 2008)。心理療法のなかで風景構成法を用いる場合においても、たとえば初回面接において本法を施行し、作品から描き手の病態水準や今後の治療の指針を把握することがあるわけであり、アセスメントと治療を切り離して考えることは出来ない(皆藤, 1994)は指摘した。

アセスメントとして風景構成法が用いられる場合には、性格検査や知能検査といった他の検査とのテストバッテリーを組んで用いられることが多い。発達との関連を検討した研究、病理との関連をみた研究、性格特性との関連をみた研究など、様々な視点から研究が行われてきた。特に発達の視点を持つ研究では、山中(1984)が発達の側面における風景構成法の特徴をいくつか挙げ、弘田(1986)も幼稚園年長児から大学生までの計284名を対象として風景構成法の各アイテムの発達の特徴を指摘した(表1)。具体的には、遠近法の導入・立体描写といった写実的な表現は小学4年生において増加し、中学生でさらに急増すると同時にその出現率が最も高くなること、また、「大きな面積を持った田」「針葉樹の育つさびしい空間」が中学生以後増加する点、大学生男子において「急峻な稜線を持つ青い山」が多くみられることなど、発達の変化にともなう各アイテムの特徴的な描画表現が報告された。

¹本論は、阿部(2012)の修士論文に新たな分析と考察を加えたものである。

表1 幼児から大学生までの発達的特徴(弘田(1986)を基に作成)

	幼児	小学生	中学生	高校生	大学生
川	波線のみ、矩形丸く囲まれた形	此岸なしの川	先細り、蛇行	空からの川	右上→左下の川
山		連山(2年)遠景配置(4年)混色(6年)	奥への連山(思春期・男子)		急峻な稜線・青色の山(男子)
田		小さい田の減少 → 一定の大きさの田が増加			
道		宙に浮く道(2年)	川による行き止まり	Y字路・T字路	開放形の途切れた道(女子)
家			立体表現		窓・入口のない家
木	実の描写		針葉樹		
人	顔の描写(100%)		記号化		性不明、またはほぼ描画者と同性
花		山中に配置(2年)			群生、2輪以上近接
動物		男女による出現率の相違、魚・キリン・ライオン等の減少			
石	小石(人が持てる程度)			川中配置が多い(小6以外)	
付加物		太陽・雲・橋が高頻度で出現、太陽は年齢とともに減少、雲・橋は増加傾向			

皆藤(1994)は、病理群と健常者群との比較において、風景構成法分析指標の中から病理群に特徴的に出現する指標を報告した。表2と表3はそれらの指標をまとめたものである。皆藤(1994)によれば、表2は発達に伴って減少する指標ないし複合出現指標であって、作品における退行指標と捉えることが出来ると考えた。具体的には、川の上下配置と記号的・無彩色の木などを退行指標として挙げた。皆藤(1994)はここから、描き手の人格発達の段階なり特性を読みとることも可能であろうと主張した。

表2 病理群における退行指標(皆藤, 1994)

・三つ以上の視点場	・正面+上空視向	・濃い彩色
・力動的素描線	・川の上下配置(8~10歳)	・連山(6歳)
・紙面1/10以下の田	・二次元表現の家	・幹上直の木
・記号的な木(6~9歳)	・全一線枝(6~9歳と18歳)	・無彩色の木(6~9歳)

注)「力動的素描線」は非分裂病群に特徴的な指標、他は病理群に特徴的な指標

皆藤(1994)によれば、表3は発達的な増減傾向を持たない病理群に特徴的な指標で、発達段階全体を通しての指標の出現率が0~15%以内で、発達段階全体を通してほとんど出現しないと考えられる明確な病的指標であると報告した。具体的には、病理群に特徴的な指標として、自己像が家の中に配置されること、無彩色の田や道が描かれることが多いことなどを指摘した。

表3 発達とは関連しない病的指標(皆藤, 1994)

・ 枠と接しない素描線	・ 独立峰	・ 無彩色の田
・ 無彩色の道	・ 一線路	・ 明らかな歪みのある家
・ 一部無彩色の木	・ heterochromatism(異色性)の木	
・ 風景の中の自己像の家の中配置	・ 記号化の花	・ heterochromatismの動物

注)「枠と接しない素描線」「風景の中の自己像の家の中配置」は分裂病群に特徴的な指標, 他は病理群に特徴的な指標

青年期を対象とした研究では、菅藤(2007)、運上・橘・長谷川(2009)、鷲岳(2006)が、項目ごとに現れる特徴について様々な知見を報告してきた。このように、風景構成法と他技法とを比較した研究は多く行われてきたが、これらの研究のほとんどは他技法との比較によって心理療法過程を理解したり、あるいは分裂病心性を理解したりしようとするものであり、風景構成法の妥当性を検討したり、その特徴を検討したりするものではないため、基礎的研究として体系的にまとめたものではないとの皆藤(1994)の指摘を越えていない状況にあるのではないかと思われる。つまり、バウムテストやロールシャッハ・テスト、HTP法といった他の絵画療法に比べて、基礎的研究としての他の心理検査との関連の検討が少ない現状にあると考えられる。

皆藤(1994)によるとこれまで実際に行われたのは、風景構成法と Y-G 性格検査との関連(皆藤, 1990)を除くと、バウムテストおよび P-F スタディとの関連(大石, 1988)、箱庭表現との比較(皆藤, 1991)が見られる程度である。このほかにも 5 因子性格検査の一つである FFPQ(辻, 1998)との関連を検討した研究(阿部, 2010)はあるが、ロールシャッハ・テストと比べれば研究数は少なく、風景構成法はより多くの基礎的・体系的な研究が望まれる状況にあると思われる。

風景構成法ではこれまで各専門家特有の読み取りが中心であり、経験の浅い臨床家が作品を理解するには長年の経験が必要とされてきた。したがって、経験の浅い臨床家にとって、各作品のアイテムの描画特徴と、抑うつや不安といった不適応状態につながりやすい指標との関連を統計的に理解することができると、アセスメントの際により一層の理解が深まるだけでなく、クライアントの症状の早期発見・早期対処に役立つと思われる。

そこで本研究では、作品に表れる描き手の内的状態をより有効に読み取るために、風景構成法で描かれるアイテムの特徴と、抑うつ状態・特性不安との関連について先行研究の知見を踏まえながら統計的に検討した。

II 方法

1. 調査対象者 大学生 83 名(男性 22 名、女性 61 名)を対象に実施した。
2. 調査期間 調査時期は、2010 年 6 月から 2012 年 1 月であった。
3. 質問紙 抑うつ得点は、一般人のうつ症状診断スケールである CES-D (The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale)20 項目(島・鹿野・北村・浅井, 1985)を使用した。この尺度は質問文にあてはまるがこの一週間のうちで「ない(一日未満)(0 点)」から「5 日以上(3 点)」の 4 段階評価で、合計得点が 16 点未満を「低群」、16 点以上を「高群」とし、分析を行った。不安得点は、日本語版 STAI(State-Trait Anxiety Inventory)の

特性不安尺度 20 項目（清水・今栄, 1981）を使用した。この尺度は「全く当てはまらない（1 点）」から「非常によく当てはまる（4 点）」の 4 段階評価で、合計得点が 44 点未満を「低群」、44 点以上を「高群」とし、分析を行った。

4. 手続き 平成 22 年度は 40 名（男性 10 名、女性 30 名）、平成 23 年度は 43 名（男性 12 名、女性 31 名）に、授業の一環として 10～12 人の集団法にて年度ごとに 4 回に分けて施行した。なお、調査に協力してもらうにあたって、調査の概要を説明した後、状態に応じていつでも途中でやめられることを伝え、出来る範囲での協力をお願いした。

風景構成法では B4 の白画用紙と黒のサインペン、12 色の色鉛筆を使用した。画用紙の中に描く「枠」は、施行者が対象者の前で描いて見せるのが本来のやり方ではあるが、本研究は集団法にて実施したため、事前に黒枠を手書きした用紙を、被験者に一枚ずつ配布するという手続きを取った。教示は下記のように行った。「これから、風景を描いてもらいます。絵の上手下手を見るわけではないので、好きなように描いてください。描いてもらうものは全部で 10 個あって、10 個描くとちょうど 1 つの風景になるようにできています。1 つ描き終わるごとに、次に描いてほしいものを言いますので、私の言う順番に描いてください。」

5. 風景構成法の分析指標 風景構成法作品の描画特徴を検討するための資料として、皆藤(1994)、山中(1984)、弘田(1986)の研究を参考に、57 項目の分析指標を作成した(表 4)。なお、風景構成法分析指標と抑うつとの関連を検討する場合には、CES-D の回答が得られた 61 名分を用いており、不安との関連は 83 名のデータを用いて分析した。

Ⅲ 結果

1. 風景構成法分析指標と抑うつ群との関連 風景構成法分析指標と抑うつ得点低群・高群との χ^2 検定の結果で、統計的に有意な差が得られたのは 3 指標であった(表 5)。「田・水田」に関して、抑うつ低群では田に水を張る描写（水田）が半数を超えたが、抑うつ高群では 8 割以上が水田を描かなかった人数の偏りが 1% 水準で有意に認められた。「道・分岐」に関しては、抑うつ高群では、分岐のある「道」は分岐なしの「一本道」より多いものの、抑うつ低群の 9 割以上が分岐する「道」を描いた人数の偏りが 1% 水準で認められた。「付加物・雲」に関しては、抑うつ高群は低群に比べて雲を追加で描かなかった人の割合が 5% 水準で有意に大きかった。以上のことから、抑うつ度の低い人では「水田」、「分岐のある道」、「雲」を描く人が多いことに比べ、抑うつ度の高い人ではこれらの分析指標を描く人の割合が相対的に少ない傾向が示された。

表4 風景構成法分析指標（皆藤(1994)、山中(1984)、弘田(1986)を参考に作成)

アイテム	分析指標	番号	アイテム	分析指標	番号
川	面積 [※]	1	人	花付近	30
	形	2		動的な動き	31
	流れ	3		釣り人	32
	道との関係	4		働く人	33
山	高さ [※]	5	木	数 [※]	34
	頂上の数 [※]	6		家付近	35
	幅	7		並木(道付近)	36
	枠切れ	8		数 [※]	37
田	面積 [※]	9	花	群生	38
	位置	10		川辺	39
	枠切れ	11	動物	種類	40
	遠近効果	12		数 [※]	41
	稲	13		人のそば	42
	水田	14		大きさ [※]	43
道	形	15	石	数 [※]	44
	山道	16		川との関係	45
	田への道	17		道との関係	46
	遠近効果	18		位置	47
家	数 [※]	19	その他	密集した石	48
	位置	20		橋	49
	枠切れ	21		太陽	50
	路傍	22		雲	51
	二次元	23		草	52
	玄関等	24		鳥影	53
人	数 [※]	25	彩色	混色	54
	田付近	26		空の彩色	55
	路上	27		地面の彩色	56
	家付近	28		服への彩色	57
	対人関係	29			

※は数量化指標を示す。

表5 抑うつ群別風景構成法分析指標の出現頻度及び出現率と χ^2 検定結果

風景構成法分析指標	抑うつ				χ^2 値	
	低群 (n=27)		高群 (n=34)			
	出現頻度	出現率	出現頻度	出現率		
田・水田	水田	16	59.3	4	11.8	15.40 **
	その他	11	40.7	30	88.2	
道・分岐	あり	25	92.9	21	61.8	7.71 **
	なし	2	7.4	13	38.2	
その他・雲	あり	9	33.3	4	11.8	4.18 *
	なし	18	66.7	30	88.2	

**p<.01, *p<.05

2. 抑うつ群別各数量化分析指標と抑うつ度との関連 抑うつ度群別に風景構成法分析指標の中の10個の数量化指標と抑うつ度の各相関係数を示したのが表6である。

抑うつ高群では、抑うつ度と「人の数」の間に正の相関が認められた($r=.388$)。また、抑うつ高群では、「家の数」と「人の数」または「石の数」との間に正の相関が認められた($r=.389$; $r=.384$)。一方、「川の面積」と「山の高さ」の間には負の相関が認められた($r=-.386$)。

抑うつ低群では、抑うつ度と「川の面積」の間に負の相関が認められた($r=-.475$)。抑うつ低群では、「家の数」と「人の数」および「木の数」($r=.598$; $r=.446$)、「人の数」と「動物の数」($r=.446$)、「木の数」と「石の数」との間に正の相関が認められた($r=.407$)。

表6 抑うつ群別各数量化指標と抑うつ度の相関係数

	川の面積	山の高さ	田の面積	家の数	人の数	木の数	花の数	動物の数	石の大きさ	石の数	抑うつ度
川の面積	1.000	-.386*	.041	-.254	-.133	.286	.069	-.247	.324	-.066	.054
山の高さ	.164	1.000	.110	.042	.023	.170	.266	.050	-.063	.125	-.054
田の面積	.227	.098	1.000	-.059	.001	.102	.329	-.104	-.078	-.108	-.005
家の数	-.133	-.029	.065	1.000	.389*	.361	.158	.120	-.158	.384*	.086
人の数	-.079	-.221	.165	.598**	1.000	.265	.272	-.061	-.139	.223	.388*
木の数	-.133	-.155	.153	.446*	.299	1.000	.280	-.208	.201	.243	.124
花の数	-.085	.229	-.274	.264	.151	.231	1.000	.046	.062	.314	.043
動物の数	-.202	-.135	.072	.287	.446*	.214	.338	1.000	-.209	.226	.153
石の大きさ	.170	-.109	-.174	.174	-.163	-.304	-.176	-.173	1.000	-.128	.020
石の数	.130	.034	.017	.074	.124	.407*	.304	.060	-.288	1.000	-.031
抑うつ度	-.475*	-.028	.039	.215	.303	.059	-.066	.287	.029	-.096	1.000

上段は抑うつ高群、下段は抑うつ低群を示す。

** $p < .01$, * $p < .05$

3. 風景構成法分析指標と特性不安群との関連 風景構成法分析指標と特性不安群との χ^2 検定の結果、統計的に有意な差が出た結果を表7に示した。「山・枠切れ」に関して、不安低群では枠で途切れる「山」の出現率に大きな偏りはなかったが、不安高群ではほとんどの「山」が枠の中におさまる描写となっていた。「田・稲」に関しては、稲の描写は不安の高低群によらず多かったが、不安高群のほうが稲を描いた割合が大きかった。「家・路傍」では、不安低群では「家」を道から離れたところに描き、不安高群では道のそばに描く人の割合が大きかった。「空の彩色」では、不安高群では彩色の有無に人数の偏りは認められなかったが、不安低群では空に彩色している人の割合が大きかった。「地面の彩色」では、不安高群に比べて不安定群で地面に彩色をした人の割合が大きかった。

表7 特性不安群別風景構成法分析指標の出現頻度及び出現率と χ^2 検定結果

風景構成法分析指標		特性不安				χ^2 値
		低群 (n=38)		高群 (n=45)		
		出現頻度	出現率	出現頻度	出現率	
山・枠切れ	あり	16	42.11	4	8.89	12.43 **
	なし	22	57.89	41	91.11	
田・稲	あり	31	81.58	44	97.78	6.21 *
	なし	7	18.42	1	2.22	
家・路傍	あり	13	36.11	24	63.16	5.41 *
	なし	23	63.89	14	36.84	
彩色・空の彩色	あり	29	76.32	21	46.67	7.56 **
	なし	9	23.68	24	53.33	
彩色・地面の彩色	あり	33	86.84	30	66.67	4.59 *
	なし	5	13.16	15	33.33	

** $p < .01$, * $p < .05$

4. 特性不安群別各数量化分析指標と特性不安度との関連 特性不安群別に風景構成法分析指標の中の10個の数量化指標と特性不安度の各相関係数を示したのが表8である。

特性不安高群では、特性不安度と各数量化分析指標の間には有意な相関は認められなかった。特性不安高群では、「川の面積」と「山の高さ」の間に有意な負の相関が認められた($r = -.276$)。特性不安高群では、「人の数」と「家の数」との間($r = .468$)、「花の数」と「家の数」との間($r = .299$)、「石の数」と「家の数」または「人の数」で正の相関が認められた($r = .391$; $r = .305$)。

特性不安低群では、「家の数」と「人の数」、「木の数」、「花の数」、「動物の数」との間に正の相関が認められた($r = .862$; $r = .609$; $r = .404$; $r = .435$)。「人の数」と「木の数」、「花の

数」、「動物の数」との間にも正の相関があった($r=.560$; $r=.351$; $r=.509$)。「木の数」は「花の数」、「石の数」との間には正の相関があったが($r=.404$; $r=.505$)、「石の大きさ」とは負の相関があった($r=-.361$)。「花の数」は、「動物の数」と「石の数」と正の相関があった($r=.405$; $r=.509$)。「石の大きさ」は「石の数」と負の相関が認められた($r=-.386$)。

表8 特性不安群別各数量化指標と特性不安度の相関係数

	川の面積	山の高さ	田の面積	家の数	人の数	木の数	花の数	動物の数	石の大きさ	石の数	特性不安度
川の面積	1.000	-.276*	.117	.053	.012	.008	.093	-.107	.147	-.130	.054
山の高さ	.068	1.000	.130	.071	-.003	.166	.084	-.191	-.108	.249	-.151
田の面積	.176	.029	1.000	-.124	-.038	.149	.006	.196	-.152	-.033	-.262
家の数	-.124	-.107	.171	1.000	.468**	.268	.299*	.136	.020	.391**	-.062
人の数	-.158	-.155	.168	.862**	1.000	.195	.236	.140	-.172	.305*	-.044
木の数	-.103	-.239	-.032	.609**	.560**	1.000	.233	-.073	-.122	.226	-.104
花の数	-.021	.347	.139	.404*	.351*	.404*	1.000	.020	-.083	.180	-.009
動物の数	-.236	.048	-.142	.435*	.509**	.337	.405*	1.000	-.152	.201	.029
石の大きさ	.217	.230	.014	-.208	-.231	-.361*	-.306	-.298	1.000	-.227	.161
石の数	.250	.044	.181	.144	.115	.505**	.509**	.172	-.386*	1.000	-.088
特性不安度	.228	-.349	-.129	.121	.106	.195	-.186	.058	.005	.081	1.000

上段は特性不安高群、下段は特性不安低群を示す。

** $p<.01$, * $p<.05$

IV 考察

本研究では、作品に表れる描き手のメッセージをより有効に読み取るためと、風景構成法をテストバッテリーとして用いる際に役立つ知見を得るために、風景構成法で描かれるアイテムの特徴と、抑うつ状態・特性不安との関連について検討した。風景構成法分析指標と抑うつとの関連では3指標、特性不安との関連では5指標において有意な関連が認められた。

1. 風景構成法分析指標と抑うつ群との関連

抑うつに関しては、抑うつ高群では水田以外の「田」が多く、そのなかには無彩色の田も含まれていること、抑うつ低群よりも高群において分岐のない「道」、いわゆる「一線路」が多く描かれていた結果は、皆藤(1994)の病理群に特徴的な指標の一部と一致した。また、抑うつ高群が「付加物」である雲を描き加えない結果は、形の曖昧なものを描き足すという自由度の高い行動が、抑うつが高い状態では負担の大きいものであった可能性が考えられる。したがって、抑うつ高群においてこれら3つの描画の特徴は病理に発展する可能性が示唆されるので、3つの特徴を示す人には早期の専門的サポートを受けることが望まれる。

つぎに、各数量化指標と抑うつ度の関連では、まず抑うつ高群において、抑うつ度と「人の数」の間に正の相関が認められたが、この結果は他者の存在に敏感なり、周囲に人がいる状況を意識しやすいことを示しているのかもしれない。「家の数」と「人の数」または「石の数」との間に正の相関が認められたが、家を多く描くことができる人は、人や石を多く描くことができるエネルギーがあると思われる。「川の面積」と「山の高さ」の負の相関は、精神的なエネルギー量を象徴する「川」が大きいほど乗り越えるべき課題を象徴する「山」が低く感じられ、エネルギー量が小さいほど課題が高く大きく感じられやすかったのではないかとと思われる。抑うつ低群では、抑うつ度と「川の面積」の間に負の相関が認められたが、これは抑うつ度が大きくなれば描き手のエネルギーが小さくなるという内的状態の表出と思われる。皆藤(1994)によれば、面積の大きい川は健康度の高さを示すので、この抑うつ度と「川の面積」との負の関係は、抑うつ高群においても認められると予想したが、

有意な結果は得られなかった。このほかにも、抑うつ低群では「家の数」と「人の数」および「木の数」、「人の数」と「動物の数」、「木の数」と「石の数」との間に正の相関が認められたが、抑うつ高群と同様に、家や人を多く描く人は他のアイテムも多く描くエネルギーの大きさの表れと思われる。

2. 風景構成法分析指標と特性不安群との関連

特性不安に関しては、特性不安高群では低群に比べて、枠の中におさまる「山」と「田」における稲の描写、路傍に描かれた「家」の描写が多くみられた。特性不安高群では、一般的に想定される表現をすることで、他者との差異を小さくし、その結果不安を弱めようとする自我防衛的な機能があったのではないかと推察される。一方、特性不安低群では、「空の彩色」と「地面の彩色」がより多くみられた。彩色は心のゆとりを示す可能性と思われる。

つぎに、各数量化指標と特性不安度の関連では、特性不安高群と低群のいずれの不安度も各数量化指標との間に有意な相関は認められなかった。したがって、数量化指標から特性不安度を推測することは困難であることが示された。

特性不安高群における数量化指標間の相関では、抑うつ高群の結果と同様に「川の面積」と「山の高さ」の間に有意な負の相関が認められた。精神的なエネルギー量を象徴する「川」が大きいほど乗り越えるべき課題を象徴する「山」が低く感じられ、エネルギー量が小さいほど課題が高く大きく感じられやすかった結果と思われる。一方、「人の数」と「家の数」、「花の数」と「家の数」、「石の数」と「家の数」または「人の数」で正の相関が認められた。特性不安低群でも、「家の数」と「人の数」、「木の数」、「花の数」、「動物の数」との間、「人の数」と「木の数」、「花の数」、「動物の数」との間、「木の数」は「花の数」、「石の数」との間、「花の数」は、「動物の数」と「石の数」との間に正の相関があったが、「石の大きさ」は「木の数」と「石の数」の間に負の相関があった。特性不安が高くても低くても、人や家を多く描くことができる人は、心的エネルギーが大きいので、木や花や石を多く描くことができたとと思われる。なお、「石の大きさ」は「石の数」と負の相関であったが、小さい石を多くまたは大きい石を少なく描くことによって、「石」が紙面上に占める割合を調節したと思われる。なお、「大きさ」の指標をとったのは「石」のアイテムのみであったので、他の「人」、「木」、「花」、「動物」においても「大きさ」の指標をとれば、各アイテムの「数」と「大きさ」の間に負の相関が認められたかもしれない。まとめると、抑うつと特性不安の高群に比べて低群では、各数量化指標間でより多くの関連がみられたことから、より健康的で心理的な負担感が低い状態においては、統合的な描画となりやすい傾向が示唆された。

以上、風景構成法分析指標と抑うつまたは特性不安との関連を統計的に検討した結果、抑うつ高群では3つの指標が統計的に有意になり、特性不安群では高群に比べて低群において数量化指標間の相関が多くみられる結果となった。前者の知見は病理の指標の可能性として、後者の知見は健康度の指標として用いられる可能性があると思われる。今後の課題としては、本研究では健常者のみを対象としたため、実際に病理を持つ人々の作品についても分析を行い、描き手のより幅の広い状態をアセスメントする有効な指標を検討する研究が望まれる。さらに、今回の研究知見は描き手の状態を知る手がかりの一つであるので、実際の臨床場面では他のテスト結果も含めた複合的なアセスメントが必要と思われる。

引用文献

- 浅田剛正 2008 描画法におけるセラピストの主體的関与について 風景構成法を用いた関与の多様性の検討から 心理臨床学研究, 26(4), 444-454.
- 阿部紗希 2010 風景構成法と5因子性格検査(FFPQ)との関連について 平成21年度岩手大学人文社会科学部特別研究報告書
- 阿部紗希 2012 風景構成作品と抑うつ・不安との関連 平成23年度岩手大学大学院人文社会科学部研究科修士論文
- 弘田洋二 1986 風景構成法の基礎的研究 発達的な様相を中心に 心理臨床学研究, 3(2), 58-70.
- 弘田洋二・長屋正男 1988 「風景構成法」による神経症的登校拒否の研究 心理臨床学研究, 5(2), 43-58.
- 皆藤章 1990 風景構成法の基礎研究(2)—Y-G性格検査との関連 日本心理臨床学会第9回大会発表論文集, 88-89.
- 皆藤章 1991 風景構成法の基礎研究(3)—箱庭表現との比較 日本心理臨床学会第10回大会発表論文集, 312-313.
- 皆藤章 1994 風景構成法—その基礎と実践 誠信書房
- 皆藤章 2002 風景構成法の事例と展開—心理臨床の体験知 誠信書房
- 皆藤章 2009 風景構成法の臨床を巡って 皆藤章編 風景構成法の臨床 現代のエスプリ, 505, 5-22.
- 菅藤健一 2007 非行少年の描画上の変化と適応上の変化との関連について 心理臨床学研究, 25(2), 197-205.
- 河合隼雄 1984 風景構成法について 山中康裕編 『H・NAKAI 風景構成法』 岩崎学術出版社 pp.245-259.
- 中井久夫 1970 精神分裂病者の精神療法における描画の使用—とくに技法の開発によって得られた知見について 芸術療法, 2, 77-90.
- 大石勝代 1988 風景構成法について(1)—P-Fスタディとの関連 人間発達研究, 13, 13-22.
- 大石勝代 1988 風景構成法について(2)—バウムテストとの関連 日本心理学会第53回大会発表論文集, 340.
- 佐々木玲仁 2005 風景構成法研究の方法論について 心理臨床学研究, 23(1), 33-43.
- 佐々木玲仁 2007 風景構成法に顕れる描き手の内的なテーマ その機序と読み取りについて 心理臨床学研究, 25(4), 431-443.
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 1985 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生)の作成 教育心理学研究, 29(4), 348-353.
- 辻平治郎(編) 1998 5因子性格検査の理論と実際—こころをはかる5つのものさし— 北大路書房
- 運上司子・橘玲子・長谷川早苗 2009 風景構成法に表現される「石の大きさと位置」—青年期を対象として— 臨床心理学研究, 3, 37-43.

- 運上司子・橘玲子・長谷川早苗・中村協子 2010 風景構成法における彩色についての考察 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, 4, 19-23.
- 鷲岳覚 2006 女子学生の心理社会的発達課題と風景構成法 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 15, 86-87.
- 山中康裕 1984 <風景構成法>事始め 山中康裕編 H・NAKAI 風景構成法 岩崎学術出版社 pp.1-36.